

2. “現代スポーツ”の概念的把握のための視座について

関 春南

はじめに

現代スポーツは、商業主義、メディア、科学技術の発展、高度化への欲望の発展といった契機をもとに、急速に変容しはじめている。スポーツという文化もまた、人間生活をより豊かなものにするために生みだされ、その人間的価値が継承され、発展してきたものであるが、今日進行している事態は、これまでと様相を異にし、スポーツの発展が、われわれのコントロールを越えた外的諸力によって規定され、方向づけられて展開するという面が強まってきている。その意味では、全く新しい歴史的段階を迎えているといえるのである。沢山の鬼子が、あたかも主役の顔をして、舞台上で踊りはじめているのだ。そして、スポーツの価値の変質を迫っている。——文化としてのスポーツの発展の方向はこれでよいのだろうか。今、求められていることは何なのだろうか。

本稿は、このような問題状況を理論的に整理していくための一つの覚書である。

1 スポーツ現象の急速な変容

ここで“現代スポーツ”という場合、およそ70年代後半から80年代以降の日本のスポーツを念頭においている。現代スポーツのスポーツ現象を特徴づけている指標は三つあると私は考えている。

第一は、スポーツの商業主義化である。スポーツを商品と見なし、利潤追求の対象として位置づけ、市場原理に基づいて、つまり、スポーツを経済の原理と結びつけて、展開させようというものである。これは、80年代の「民活路線」という経済政策路線をベースに推進され、公共スポーツ施設への補助金の削減、「民間委託」化という形で現

れた。他方で商業スポーツ施設の建設が進行した。その結果、利用料金の高騰、クラブ活動への抑圧、スポーツ施設の偏在、活動種目の限定等のスポーツの大衆的・国民的発展を阻むような事態が生み出された。また、「商品として売れる」という基準が面前に出され、これに基づいて新しいスポーツが導入され、あるいは開発された。

第二は、メディア・スポーツ化である。オリンピックやサッカーのワールドカップなどの莫大な放映権料に見られるように、スポーツの発展は、もはやメディアとの関係を抜きに考えることはできなくなった。テレビ放映に相応しいスポーツは放映され、高い収入を得ることができるが、間尺に合わないスポーツはその恩恵にあずかることができない。ここから、テレビの「視聴率主義」という価値基準と「時間枠」のなかにおさまるという制約に何とか合わせようという努力が始まる。たとえば、「見て面白くするため」には、レスリングの「パーテールポジションの廃止」（寝業より立ち技を重視し、豪快な投げ技がぼんぼん飛び出すため）、あるいは、柔道の常に攻撃していることを求める「警告規定」（これは柔道本来の勝敗とは関係ないはず）などである。「時間内に終わるため」には、バレーボールの「25点ラリーポイント制」やテニスの「タイブレイク制」の導入などである。あるいは、アメリカンフットボールのように、コマーシャルタイムのための例外規定を設けたりしている。スポーツの存亡は、メディアに乗るか乗らないかにかかってきたのである。

第三は、高度化と大衆化の両極分解の進行である。マイクロエレクトロニクス革命という言葉に象徴される科学技術の驚異的進歩は、スポーツ科学にも応用され、用具が改良され、トレーニング方法が開発され、「人間改造」といわれる事態が現

れ（正常な人間に戻るには、一般的に6カ月間かかるという）、スポーツ技術は飛躍的に高まり、記録はまさに超人的なものとなり、そして刻々と塗り替えられている。スポーツの高度化は、このように完全にプロ化した一握りの人達によって担われはじめている。国民大衆から遠くかけ離れたところでの営みとなってしまった。国民大衆は、それを見て楽しんだり、与えられた貧しい生活条件とスポーツ環境という枠のなかで、多様なあり方で楽しんだりしているわけである。あたかも、異質な文化が営まれているかのように、スポーツの高度化と大衆化は両極分解の道をひたすら歩んでいるのである。

これら三つの指標は、有機的に絡み合いながら現代スポーツの全体像を呈しているが、さて文化として捉え返してみようとする、混沌として実に捉えがたい。せいぜい「現代スポーツは多様な要求にもとづいて、多様な形態をとるようになった」と、現象を説明するだけに終わっている場合が多い。問題は、混沌とした現代スポーツの奥に潜む本質をつかみとらなければならない。本質を現象との統一において捉えない限り、対象を的確に認識することはできないからである。

2 新しい概念としての「するスポーツ」「みるスポーツ」の問題

現代スポーツの先の三つの指標を貫いて最も特徴的な現象は、スポーツを観戦し鑑賞する人が飛躍的に増大し、これに商業主義がからんで展開しはじめたことである。このような状況を反映してか、スポーツを二つに分け、「するスポーツ」と「みるスポーツ」という、スポーツ認識の歴史からしても、実に不適切な、誤解を招く、非科学的な造語（概念とはいえそうもない表現）が流布した。これが、現代スポーツ認識に混乱をもたらしているのではないかとさえ思う。少なくともこれまでのスポーツ認識のひとつの到達点は、「スポーツ」という概念のなかにすでに、身体運動が多か

れ少なかれ内在されており、そのもつ意味や形態が説明されてきた。つまり、「スポーツ」は、身体運動を中核として創られてきた文化であるという認識である。そのような「スポーツ」に、あえて「する」という形容詞をつけること自体形容矛盾なのである。また、「スポーツをみる」という日本語ならわかる。しかし「みるスポーツ」となると日本語ではない。どうしても必要とされる新しい概念として、ある語句を使おうとするなら、それは、日常語ときちっとつながってなくてはならず、その上で、日常的意味を抽象した内容として定位されねばならない。つまり、概念としての体をなしておらず、その必要性も感じられない。おそらく *spectator sport* という外国語を直訳してあてたのであろうが、これは、“沢山の観客に見せるためのスポーツないしはスポーツショー”という含意で、スポーツのある特殊なあり方を表現するための概念であった。ところが日本では、これを拡大して適用し、「スポーツ」を「する」と「みる」とに分け、「スポーツをみる」現象をすべて「みるスポーツ」としてくり、乱暴に二分してしまったのである。この二分法は、「スポーツ」という文化の単純化・低俗化に手を貸すもので、今回の保健体育審議会中間報告「スポーツ振興基本計画」で、「目標を、週一回スポーツをする人が50%になるように」とだけいっているのと同レベルである。「週一回スポーツをすること」が問題なのではなく、その中身が問題なのである。「する」と「みる」を、それぞれ科学的に分析し、両者を統一的に見る視点を獲得しなくてはならない。

「スポーツをみる」現象が増大し、新たな社会的意味をもちはじめたことを契機として、スポーツをめぐる事態の改変が迫られていることから、これを肥大化させ、スポーツの全てを変えるようなものとして受けとめているのではないだろうか。

「スポーツ」の本質は、身体運動のなかにある。つまり「する」こと・実践活動のなかにある。「スポーツをみる」ことは、あくまでも鑑賞活動であり、認識活動である。その意味では、芸術活動の

一種である。現代社会では、スポーツが、見られる価値のあるもの、つまり芸術味をおびたものとして現れている。その意味では新しい芸術ジャンルがスポーツの中に創造されてきているともいえる。洗練され鍛え上げられた技と技、力と力の真剣な激突のなかに、人生のドラマを見る思いで、スポーツを観戦しているのである。これが鑑賞活動、認識活動、つまり、芸術活動でなくて何であろうか。

両者の区別をまず確認した上で、芸術活動の一種である「スポーツをみる」という営みが、身体運動を本質的な契機としてもつ「スポーツ」にいかなる形で構造的に位置づいているかを明らかにしていくことが求められているのではないだろうか。

3 現代スポーツの発展とスポーツ認識

現代スポーツをわれわれのたずなの元に引き寄せて、生活をより豊かなものにする文化として発展させていくためには、対象としてのスポーツを概念的に認識しなくてはならない。そこで最後に、スポーツの概念的認識にとって必要な視座について、私の考えているところを、そのさわりだけ述べておきたい。

スポーツという文化は、まず第一に人間的活動として捉えねばならない。人間的活動の根源的な形態は、意識的（自己意識的、目的意識的）かつ社会的（共同的）活動であり、人間主体が、客体（対象）に、一定の手段をもちいて働きかけ自己の目的を客体において実現する、つまり、客体（対象）を自己のものとして獲得する活動、言い換えれば、主体である人間が客体（対象）に働きかけ、客体（対象）を変革・克服するとともに、主体である自己自身を変革し創造する活動である。このような人間的活動の一つとしてスポーツを考察したときにはじめて、そのもつ特殊具体的な性質や特徴が見えてくるのである。この性質や特徴にかかわって第二に、価値的なものとしての考察が

必要とされる。ここで「価値的なもの」という場合、もちろん「スポーツの国民にとっての価値」を意味している。この視座が欠けると、スポーツの発展についての判断基準が失われる。その例として、ここで想起されるのは、先に触れた保健体育審議会中間報告「スポーツ振興基本計画」に出てくる次のような表現である。「スポーツを振興することは、スポーツ産業の広がりと共に伴う雇用創出等の経済的効果を生み、わが国の経済の発展に寄与する」。これでは、スポーツは経済発展の手段でしかない。スポーツ享受の主体である人間を軸にして、その人間にもたらす価値が内在的に考察されねばならない。例えば、生命の維持、健康の回復・増進にかかわる点、自己実現・人間的自由実現にかかわる点、人間相互の深いコミュニケーションに関わる点、そして今日、とりわけ大きな事態として現れてきている、見ることを通じて得られるスポーツ独特の興奮・芸術的感動の実現などをスポーツの構造のなかに的確に位置づけていくことである。そのためにも第三に、文化の存在形態としての考察が必要である。スポーツは、主体である人間が客体（対象）に働きかけ、客体（対象）を変革・克服するとともに、主体である自己自身を変革し創造する活動であり、過程であり、またその成果でもある。これらの全体がスポーツという文化である。つまり、所与としてのスポーツをもとに、活動としてのスポーツが展開され、所産としてのスポーツが残され、それをもとにまた活動としてのスポーツが展開されるというダイナミックな過程であり、それが相対的に安定的な構造をなして存在しているのがスポーツという文化なのである。

このようなダイナミックな過程としてのスポーツが、見られる対象として大きく浮かび上がってきているのである。この実態について考察したい。ここでまず確認すべきことは、ダイナミックな過程のなかでスポーツを実践している実践者とそれを見ている他者を画然と区別することである。そして、両者の関係とそれぞれにもたらされる価値

を確認していく必要がある。その一つは、他者が、すばらしい技術を獲得しているスポーツ実践者を見て感動し、自分もあのレベルまで到達したいと思い、そのスポーツを新たに始めたり、技術を高めるために練習するといった関係である。例えば、ある地域や学校にある種目で優秀選手が輩出されると、その地域や学校でその種目の底辺が拡大し、技術レベルが向上していくという状況が、このような関係を実証している。これは、みることを通じた技術獲得のよろこび・楽しさの共有にかかわる両者の関係であって、他者が、実践者のよろこび・楽しさに共感し、これを共有することを通じて、みずからの実践のエネルギーにしていこうといった事態を指している。いま一つは、他者が、スポーツ実践のなかに、生きることの感動、人生のドラマを映し出し、あたかも芝居をみる思いでスポーツを観戦しているといった関係である。この段階は、すでにスポーツ実践の本質的な契機に内在している技術獲得のよろこび・楽しさという次元を越えて、認識のよろこび・楽しさ、つまり、芸術的価値認識の域に達している。現代社会でこれがいわば、新しい芸術的価値として暗黙のうちに承認され、大衆的支持を得たのである。そして、メディアと結合し、予想をはるかに越えた商品価値を獲得し、時代を席卷することになったのである。